

====このお便りは私が担当する太極拳教室の皆さんに毎月（今年度から8月も！）お届けしています。====

## トピックス 全国大会準備進む

来る7月2日（木）に開催される「日本健康太極拳協会10周年記念全国大会」の準備が進められています。大会は同日10時から16時まで千駄ヶ谷駅前の東京都体育館メインアリーナで全国各地から約6000名が参加、うち東京都支部からは約2000名が参加して開催される予定です。私の担当教室からは3教室から29名が参加する予定です。現在運営委員会と実行委員会あわせて200名に近い役員、委員によって着々と準備が進められていますが、私も瑞江鶴の会の宇留野良子師範、小林恵子師範、藤城弘子師範ともども当日の運営担当実行委員の一員として参画しています。

## 健康妄語録 どうなる臓器移植法の改正？

臓器移植法の改正案が四つ、今国会で審議されています。5月30日現在まだ採決にはいたっていませんが、「脳死を一律に人の死とするのか」「本人の事前承諾を不要とするのか」「15歳以下の臓器移植を認めるのか」などが重要な焦点だけに審議も大変難航しているようです。

この「雲の手通信」では、第14～16号、第24号、第50号で臓器移植問題を取り上げて、現行の臓器移植法やその改正問題について疑問を提起してきました。医学的に見て脳死は人の死として割り切れない現象であり、とくに子供の脳死例では長期にわたって生存し続けているケースや回復したケースなど多くの事例が全世界から報告されているので慎重に扱うべきとの識者の考えに同意してのことです。

また仮に脳は死んだとしても、（人工呼吸器をつけているからにせよ）現に心臓や肺が活動し、それによって循環や新陳代謝が続いているのですから、これはまさに“脳は死んでいるが体は生きている存在”とでも呼ばれるべきものです。またさらに言えば脳がすべて死んだとして、それがすべての感覚や意思や感情の完全な喪失に当たるとは言えないという深刻な指摘もあります。たとえば心臓には“こころ”はないのですか？腹は痛みを感じているのではないのですか？脳死者は痛みと恐怖と絶望の中で心臓を切り取られているのではないのですか？

単に臓器移植を促進するための便宜という視点だけで扱うにはきわめて重い、かつ深刻な命題だと思いますが、皆さんはどうお考えでしょうか。

## 左顧右眄～さこ・うべん～（28）【第4話 気と気功をどう理解するのか】

### 5) なぜ欧州では消えたのか

欧州にあつてはローマ文明衰退後、キリスト教による政治、思想、文化の完全支配が約1000年続くなかで、ギリシャ、ローマの思想、文化はすべて封殺されてしまいました。 pneuma や spiritus のような言葉やその概念も“すべては創造主が作った”というキリスト教学の中では認められるはずもありません。

ようやく14世紀から16世紀にかけて、これら古典文化を復興しようといういわゆるルネッサンス運動が澎湃として起こりましたが、 pneuma や spiritus の原義や概念を復活させることにはなりません。それはたとえば、科学的な思考や方法論が重視されるなかで、近代哲学の父と呼ばれるデカルト（1596～1650）の『物質とは空間に一定の容積を占める存在であるが、心は単なる自我意識であり、物質ではない。』という心身二元論に置換されてしまったわけです。つまりその観点からすれば、気というものが、一方では物質の根源であり、一方では気持ちや心のありようであるということなどは

認められるはずもないと言うことです。

医学の分野でも同様です。科学文明の発達解剖学などの進歩を促し、体は体、心は心という心身二元論に基づく近代西洋医学の基盤は強固になってゆきました。ちなみに日本でも江戸時代まではいわゆる中国医学を取り入れた「漢方」が主流でしたが、幕末から「蘭方」というオランダ医学が持ち込まれました。日本の西欧化をあらゆる分野で急ピッチで進めるなかで、明治政府は明治16年(1883)に西洋医学のみを公認し、漢方をいっさい認めないという乱暴な法律を公布しました。

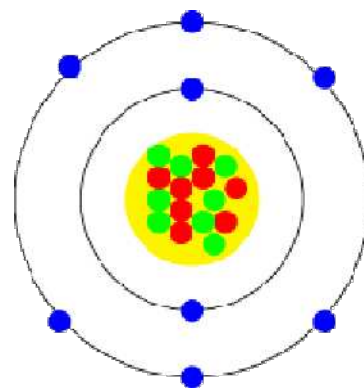
「気」についての日本人の理解と解釈が、明治維新後、「万物生成の根源の力」や「万物のもとになるもの」という部分を失ってしまったことは、このような時代の流れのなかでおきたことなのです。

では、中国やインドはただ遅れているだけなのでしょうか。いずれ話はここへ戻ってくる予定です。

## 6) 物質とは何か？現代科学からの追求

すでに述べましたように、古代文明においては『気、あるいはそのようなものが凝縮すると物質になる』というのがほぼ共通の概念でした。一度その概念を否定した西欧社会、近代社会も、改めていわゆる“科学的手法”を持ってこの命題「物質の本質は何か、物質の最小単位はなにか」に取り組み続けてきました。なぜなら、それはまさに古今東西を問わず、人類の探求すべきもっとも知的な命題のひとつだからです。

まず現代科学でいう「物質」の定義としては、哲学用語としては『空間・時間の中に位置し、大きさ・形・質量および運動の可能性を持つもの。「精神」と対比される。』とありますし、理系の用語としては『質量のあるもの。場を成立させるものを指すことが多い。基本的には、電磁場の粒子である光子なども含めて、諸粒子およびその結合体。』とあります。(広辞苑) その最小単位はというと、時代が進むにつれてより微細なものが発見されつつあります。たとえば、「原子」(アトム)が最小単位と考えられていた時期もありました。(ちなみに、「ATOM」はギリシャ語の“分割できないもの”を意味する「ATOMON」が出所で、古代ギリシャの哲学者デモクリトス(BC480~370頃)によってすでに物質の最小単位として唱えられていた言葉だそうです。)しかし、原子は「電子」「陽子」「中性子」から成ることは今では誰でも知っていることです。最近はまだそれよりも小さい「レプトン」とか「クォーク」とか言ういわゆる「粒子」が発見されているそうです。(上の図は酸素原子の構造のモデル。8個の電子、核内には8個の陽子と8個の中性子がある。)



**8個の電子、核内には8個の陽子と8個の中性子がある。**

ちなみに分子というのは原子(元素)の結合体のことです。(たとえば「水の分子」は酸素と水素の結合体である、というように。)

原子という言葉は構造的概念であり、元素というときはその特性的概念とされています。現在発見されている元素は110あまりですが、すべての物質はこの元素かその結合体で成り立っているということです。ちなみに人間の体を作っている元素は29種類だそうです。水素60.3%、酸素25.5%、炭素10.5%、窒素2.4%の4つで98.7%となりますが、こういう段階でみればモノもヒトもまったく違いはありません。

拳法小僧 その6 あばれん坊